



うわさ話に惑わされないで

宍粟市立一宮北中学校3年
小堀 ひなた

私がハンセン病について学んだのは一学期の道徳でした。この病は長い間、人類を苦しめてきました。今でも苦しんでいる人はいます。けれど、人々を苦しめた原因はハンセン病そのものだけではなく、ハンセン病について無知であった人達による差別だったのです。

道徳の授業でハンセン病についてのビデオを見ました。私はそれまでハンセン病については名前ぐらいしか知らなくて、特に関心をもったことはありませんでした。初めて見た、初めて知ったハンセン病の歴史はとても衝撃的でした。過去に自分と同じ人間がこんなひどいことをしていたのを知って、心が痛かったです。それと同時にハンセン病についての歴史をもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。

今から百数十年前、ハンセン病の患者は施設に隔離され、周囲の人たちからは白い目で見られ、家に帰ることもできず、ひどい差別を受けていました。宗教的な観点から「前世で悪いことをした。」^{けが}「穢れを持って生まれた。」と言われたり、近づくと感染するというような誤解をされていました。目を背けたいような事実です。なぜ患者たちはそのような差別を受けたのでしょうか。それは、病気について無知であり人に流されやすい人が多かったからなのです。ハンセン病の原点は、明治の初めノルウェーで「らい菌」というハンセン病の原因となるものが発見されました。そして日本ではハンセン病を撲滅するため「らい予防法」というハンセン病患者を療養所に隔離するための法律を制定しました。人を人として扱わない政策に法律があったなんてとても驚きました。すごく悲しいです。そして私が一番腹が立ったのは、ハンセン病の治療法が見つかったのにも関わらず、患者の強制隔離がそのまま続けられたことです。当時の政策が何を考えていたのか私は知りたいです。隔離されていた時間は戻ってきません。えぐられた心の傷は簡単に癒えません。私はこの話を聞いているとき、本当に気分が悪かったです。

そのあと、当時ハンセン病で強制隔離されていた方々にインタビューをしているシーンがありまし

た。施設内で使用する貨幣や冷たい薬のお風呂で消毒されたり、なかでも一番印象に残ったのは家族に迷惑がかかるから名前を偽る人が多かったことです。こんなことをせざるを得なくなるまで人々を追い込んだこの事実は決して風化させてはいけないと思います。子どもで隔離されていた子たちはみんなと同じように学校に行くこともできません。施設内の寺小屋のような所でしか勉強することができません。私たちは日本国憲法上、教育を受ける権利をだれもが持っています。ですが、この隔離されていた子ども達は平等に教育を受けることができていませんでした。少人数の権利よりも大人数の権利を優先する「公共の福祉」というものがありますが、この強制隔離は公共の福祉で済む話ではありません。

私は社会の勉強があまり好きではありませんでした。特に歴史なんて昔のことなんか知って何になるんだと思っていました。でも、それは間違っていました。社会の先生が、「歴史はくり返す。間違った歴史をくり返さないように勉強するんだ。」と、授業中に言われました。その時私はすごく納得しました。今まで好きではなかった歴史も勉強したい、そして間違った歴史をくり返さないように自分の学んだことを多くの人に伝えたいと思いました。

悲しいことに、現代も人々の無理解による差別問題はなくなっていない。2011年に福島で原子力発電所が爆発してしまい、たくさんの方が被害に合いました。事故に巻き込まれ、家がなくなってしまう、避難した方々があるホテルに泊まろうとすると、「福島県民はダメだ」と宿泊を拒否された事件がありました。2016年、熊本地震が起き、復興のため全国から支援物資が届きました。「あのとき助けてもらったお礼に」と熊本へ直接物資を届けに行ったのに、受け取ってもらえなかった福島県民の方がいたそうです。この他にも、住んでいる場所や集落を差別する部落差別などの同和問題が現代にはたくさん残っています。

今も昔も差別がなくなる理由、やはりそれは無知な人々たちによる偏見、そして人に流されやすい人が多いからなのです。みなさんも自分自身に、どこか心あたりはないでしょうか。悲しい歴史を二度とくり返さないように、そして現代に続く差別問題をなくすためには、知識を身につけること、一人ひとりが他人に流されないように強い自分をもつことが求められているのです。

審査委員 講評

ハンセン病の背景がよく書けている。人間は真実をよく知らずに、人のうわさや情報だけで他人を見てしまうことがあり、そのことにより、差別が発生することがうまく表現できている。



故郷とは何か考えてみた

宍粟市立波賀中学校3年
岸本 小雪

すみわたる陽がそそぐ ふるさとの風景に
また会えるその日を つよく信じて

これは、「いつかこの海をこえて」という合唱曲の歌詞の一部です。ただ、この歌詞には特別な思いが込められています。なぜなら、この歌詞は東日本大震災で被災した岩手県の釜石東中学校の生徒の言葉を元に書かれているからです。私はこの曲を小学五年生の時に初めて歌いました。

私は小学生時代から市内の合唱団に所属して活動していました。とにかく歌うことが好きで合唱を始めたのですが、成長するにつれて音楽記号や歌詞に従ってそのまま歌うだけでなく、歌詞に込められた思いを知ることで歌に幅や深みが表れてくることを少しずつ理解していきました。そのなかで出会ったのがこの合唱曲、「いつかこの海をこえて」だったのです。

東日本大震災が起きたのは、私が小学二年生の三学期でした。だから、なんとなく大変なことが起きている程度しか理解できなかったのです。しかし、この合唱曲を歌うことになって、私なりにこの大震災について調べました。すると、すべてではないにしても、歌詞の裏にある思いや願い、悲しみなどが解り始めたのです。歌詞に込められた故郷と友だちを大切にしていることを理解して、この合唱曲を何回もステージで歌ってきました。

そういうことがあって、テレビなどの自然災害のニュースに注目するようになりました。去年、熊本県を襲った地震、岩手県の台風による豪雨災害、そして今年の九州北部豪雨による災害……。よく考えると、毎年大きな自然災害が起き、多くの方が亡くなるとともに、住宅や道路、山や川などがなくなり、その姿が激変し、ある意味で故郷を失う人々が多いことが解りました。

そして、九州北部豪雨の被災者で福岡県朝倉市に住むTさんの言葉が胸に突き刺さりました。Tさんの家は流されて土砂の下に埋まり、奥さんが今も行方不明のままです。検索は難しく、ひたすら発見を待ちわびる日々のなかでTさんが取材に応じておっしゃった言葉は、「生存の見込みは少ないじゃろう

けど。旦那が諦めてはいかん。家族が諦めてはいかん」です。なんと強い言葉で、諦めないことの難しさを表した言葉でしょう。

私たちが逆らえない大自然の脅威によって毎年、「故郷」が破壊されています。しかし、どの災害にしても人々はその故郷を取り戻すために、今も諦めずに活動している人々が全国の被災地にいます。それに関して、ある日、同級生の一人が言いました。「なんで元の場所に住みたいと言う人が多いんやろ。災害が起きやすい土地を離れて住むほうが安心なはずなのに」と。その同級生は悪気があって言ったわけではありません。純粹に、危険な土地に住むより安全な土地に住むことを選ぶほうがいい、と思ったからでしょう。

しかし、私は思います。故郷だから離れられないのだと。故郷が好きだから、大好きな場所だから、取り戻したいのに違いないと。現実には、大震災の原発事故で避難生活を続けている人々のなかには、避難区域が解除されたら戻りたいという人々がいることを伝えるテレビのニュースを見ました。その人々は、なかなか進まない除染作業にいらだちながらも、じっとその日を待っているのです。

地震にしろ豪雨災害にしろ、山や川、道路をはじめ、集落や町の姿は復興が終わったとき、以前とは違った姿になっているはずですが。しかし、被災者の多くがその土地にまた住みたいという願いをもっています。私が、故郷だからこそ住みたいんだ、という理由にたどりついたのは、合唱曲の歌詞を再び考えたからです。合唱曲の後半に、「眼をとじればそこに／なつかしい笑顔／いつの日もそばにいる／たとえ離れていても／だから前を向いて／歩んでいこう」という歌詞があります。この歌詞は、九州北部豪雨の被災者のTさんとも重なり合います。

私はまもなく、進路選択の時期を迎えます。進路先次第では兵庫県を離れることになり、場合によっては、もう今の町に住むことは一生ないかもしれません。だから今年、「故郷」とは何かを考えられたのは、幸いだと思っています。東日本大震災のあと、「絆」という言葉が強く意識されるようになりました。合唱曲の後半の歌詞は、結局、家族の絆、夫婦の絆、地域の絆、同級生の絆など、そこに暮らした人々の絆こそが故郷そのものだということを表しているのです。卒業まで残り半年あまり。私は、私自身の故郷と人々の絆を大切にしながら過ごしたいと思っています。

審査委員 講評

合唱曲の歌詞と出会った時の感動と、故郷を大切に思う気持ちに気付いていく表現力や文章の流れが秀でている。